

## 例会佳句

八月は一年で一番暑さを感じる月であるが、七日が立秋。暦の上では秋に入るが、残暑はまだまだ厳しい。だが、暑さの中にもどことなく秋の気配が感じられるようになる。

死者の霊を供養するお盆は旧暦七月十五日前後に行われていた。明治になって新暦が採用されてから、新暦で行うところもあるが、全国的には月遅れで八月十五日前後に行うところが多い。盆踊りは平安時代の僧、空也が始めたという「踊り念仏」が起源とする説が有力。現在は信仰より娯楽的な要素が強くなっている。

八月三十一日が二百十日。春分の日から数えての日にちで、二百二十日もある。この時期に稲が開花期を迎えるが、台風の襲来が多く、特に農家は農作物の被害に警戒が必要であるため、江戸時代初期に暦注として設けられた。

九月一日は防災の日。1923(大正十二)年のこの日、甚大な被害が出た関東大震災が起き、災害対策を喚起するように定められた。

九月も中旬になると、残暑も和らぎ秋風の立つ日が多くなる。十五夜は旧暦八月十五日の月。今年も十月一日になる。中秋の名月といひ、一年中で月が最も澄んで美しいとされる。

(四季の会 世話人)  
(「シツク」の俳句は会員互選の上位句)

遠き日の母の縫い目や藍浴衣  
通されて風に触れたる夏座敷  
道えらぶ木陰こかげへ夏帽子

神奈川 中本 萬里

旅一夜浴衣に解きし心かな  
公園の水音高く夏へ入る  
夏座敷開けてダム湖を一望に

兵庫 高森 功一

青空に深紅染めたる立葵  
開け放ち大の字になる夏座敷  
二人して午後のひと時新茶汲む

東京 坂本 州賢

短夜の雨音強き旅枕  
藍浴衣糊の張りある袖通す  
夏座敷淡海の風の通り抜け

大阪 加藤 あや

母に似し筍飯の隠し味  
青田風一本道を我と往く  
古浴衣八十路迎へて丈長し

千葉 安彦 緑泉

初夏や嬰の乳歯の輝きぬ  
青芝にキャッチボールの兄おとと  
すれ違ふ金魚の柄の浴衣の子

宮城 鈴木 わかば

掛け軸の如来半眼夏座敷  
巢ごもりの散歩励ます立葵  
ゴーヤ伸び風もみどりの夏日かな

東京 坂本 秀浩

坪庭に一陣の風夏座敷  
車窓より所々に麦の秋  
湯の宿の糊のききたる浴衣かな

東京 中西 麦人

都心にも灯り落して螢狩り  
黒南風や艇軋みおり鳴門の海  
夏座敷主は父の遺影かな

東京 北詰 南風

防災の備え万全梅雨近し  
浴衣着て襟足白き中学生  
マンドリン倶楽部合宿汗まみれ

千葉 加藤 浩雲

梅雨寒の手を開き見る運命線  
沢音の間近に聞え夏木立  
民宿の外の洗面茗荷の子

神奈川 森 京子



水道・下水道人の俳句の会 「四季の会」 入会歓迎

申込先 〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-9  
日本水道会館内 日本水道新聞社気付  
「四季の会」世話係 まで